

第2部-第4章. アジア諸国の動揺と日本の開国

① 「西洋の衝撃」と西アジアの変化

※西洋の衝撃 (Western Impact) ……ペリー来航(日本)、アヘン戦争(中国)など
欧米諸国の進出に対しアジア諸国が自国の存続を図らねばならなくなったこと。
→このような考え方自体、西洋中心史観として批判もされている。

<衰退するオスマン帝国>

西洋諸国に対して劣勢となり、スルタンが地方勢力を抑えきれなくなる→**東方問題**

- ▶ **ギリシア独立戦争** (1821-29) ……英・仏・露が援助しギリシア独立達成
- ▶ エジプト…… **ムハンマド・アリー**
ナポレオンとの戦いで活躍、エジプト総督に任命される(1805)
エジプト・トルコ戦争 (1831-33,39-40)
フランスの援助を受け、オスマン帝国からの自立達成
- ▶ **クリミア戦争** (1853-56) ……英・仏の援助を受けロシアに勝利するも、帝国は財政難に
- ▶ **露土戦争** (1877) ……ロシアに攻め込まれ、ミドハト憲法停止

<オスマン帝国の模索>

- ▶ **イエリチェリ軍団**の廃止 (1826)
14c 後半創設当初はキリスト教徒の子弟をイスラムに改宗させスルタン直属軍団に組織。
→ 16c 後半にはムスリムの世襲となり、近代化を阻害する保守勢力になっていた。
- ▶ **タンジマート** (1839) ……スルタンによる上からの近代化 (恩恵的改革)
オスマン主義=帝国の住民は宗教にかかわらず法の下に平等とする
中央集権的官僚機構、軍・法律・教育の近代化
- ▶ **ミドハト憲法** 制定 (1876) ……アジア初の憲法、しかし翌年の露土戦争勃発で施行停止
- ▶ ヨーロッパ諸国と不平等条約……外国依存・伝統産業衰退

<エジプトとイランの近代化の模索>

- ▶ **イラン**……**カージャール朝** (1796-1925)
北からロシア、東南からイギリス領インドの圧力
1828 **トルコマンチャーイ条約**……ロシアとの不平等条約締結
- ※ **アフガーニー** (1838-97、イラン出身) …… **パン・イスラム主義**
国を超えてムスリムの団結を説く

1891-92 **タバコ・ボイコット運動**……イギリス商人にタバコ独占権を認めたことに対する抗議運動

1905 **イラン立憲革命** ⇔ 英・露の介入

- ▶ **エジプト**
1869 フランス人技師レセップスによる **スエズ運河** 建設 (1869 完成)
1875 イギリスが財政難のエジプトからスエズ運河株式買収 →英仏に財政支配される
1881 **オラービーの乱** ……スローガン「エジプト人のためのエジプト」
これをイギリスが単独で鎮圧し、エジプトを事実上の保護国とする

② 南・東南アジアの植民地化

<イギリスのインド支配>

▶ ムガル帝国

- ・アウランゼブ帝 (1658-1707) ……武力によってほぼ全インド統一
ヒンドゥー教との融和政策から、厳格なイスラム化政策への転換
→ 彼の死後、各地で反乱、藩王国の分立割拠状態に

・イギリス

1757 プラッシーの戦い

イギリス 東インド会社 がフランスをインドから駆逐、ベンガル州を統治

※インド伝統の綿織物生産を禁止……綿花供給地、産業革命による綿織物の市場に

1857 東インド会社インド人傭兵 (シパーヒー) の反乱 → “ インド大反乱 ” に発展
→ イギリスによって鎮圧される

1858 ムガル帝国滅亡……イギリス、東インド会社を廃止しインドを直接統治

1877 英領インド帝国 成立……イギリス国王がインド皇帝を兼ねる
現地には総督を派遣。インド各地の藩王はそのまま存続。

<国民会議派の形成と展開>

- ▶ インド国民会議……1885年、総督の諮問機関としてイギリスがインドの上流階級代表を招集
のち日露戦争に刺激されて反英的に → 民族運動団体「 国民会議派 」に

1905 イギリス、 ベンガル分割令 発布……ヒンドゥー・イスラム各居住地域に分割

⇔ 国民会議派、カルカッタ大会……イギリス支配打破の綱領採択

スワデーシ (国産品愛用)、 スワラージ (自治)、英貨排斥、民族教育

1906 イギリス、親英的な 全インド・ムスリム連盟 を結成させる
ヒンドゥー教主体の国民会議派に対抗させ、民族運動の分断を図る

1911 ベンガル分割令撤回 　　しかし以後もヒンドゥー・イスラムの対立続く

<東南アジアの植民地化>

- ▶ ヴェトナム……阮朝 (1802-1945、清の属国) ⇔ フランス・ナポレオン3世が植民地化に着手

1884-85 清仏戦争 ……フランスが清を破る
カンボジア・ラオスも合わせて 仏領インドシナ連邦 形成

- ▶ フィリピン……アメリカが、米西戦争 (1898) によりスペインから獲得

- ▶ ビルマ……イギリスが3回にわたるビルマ戦争 → 1886 英領インド帝国に併合

- ▶ マレーシア……イギリスが、18c.末からマラッカ海峡支配 → 内陸部も支配、英領マレー

- ▶ インドネシア……17c.初からオランダが植民地化を進める
19c.に現地イスラム国家を破る → 1904 オランダ領東インド 形成

※モノカルチャー経済化……欧米への輸出向けに特定の農作物を生産

- ▶ タイ……東南アジアで唯一独立を保つ

ラーマ5世 チュラロンコーン王 (1868-1910) による近代化政策

③ ヨーロッパの日本接近とアヘン戦争

<日本に接近する欧米諸国>

1791 林子平 『海国兵談』 ……海防の必要を説く → 松平定信はこれを処罰

▶ ロシア

1792 ラクスマン、漂流民大黒屋光太夫をつれて根室に来航 → 松平定信は国書受取拒否

1804 レザノフ、出島に来航し通商要求 → 幕府拒否 → 1806 ロシアは樺太・択捉攻撃

1811 日本がゴローウニンを国後島で捕縛 ⇔ 1812 ロシアが高田屋嘉兵衛を捕縛

1813 ゴローウニン事件解決 ……ゴローウニンと高田屋嘉兵衛の交換

▶ イギリス

1808 フェートン号事件

ナポレオン支配下のオランダ船を追ってイギリス軍艦が長崎湾に乱入

▶ 幕府

1825 異国船打払令 (無二念打払令) ……オランダ船以外はすべて問答無用で追い払え

1837 モリソン号事件 ……日本漂流民をのせたアメリカ船を浦賀で砲撃

1839 蚕社の獄 ……モリソン号事件への対応を批判した蘭学者 高野長英らを処罰

<アヘン戦争>

▶ イギリスと清の貿易 ……イギリスが茶・絹など輸入し、貿易赤字

→ 三角貿易 に転換

{	イギリス → インド ……綿織物 (産業革命の成果)
	インド → 中国 ……アヘン (強制裁培)
	中国 → イギリス ……茶、絹 + 銀 (貿易黒字)

⇕

清はアヘン貿易取り締まり強化

1840 アヘン戦争 (-42) ……イギリスが清を破る

1842 南京条約 ……清は上海など5港開港、イギリスに香港を割譲、賠償金支払い
追加条約で不平等条項 (領事裁判権、関税協定、片務的最恵国待遇)

<太平天国とアロー戦争>

・アヘン戦争の戦費、賠償金 → 重税 → 農民暴動

・一方、清朝は条約義務を守らず → 列強も貿易拡大が思うようにならず不満

▶ 太平天国 (1851-64) ……指導者 洪秀全、スローガン「滅満興漢」

土地均分を唱えて江西省に建国、南京まで攻め上り江南を支配
清朝は鎮圧に苦慮

▶ アロー戦争 (1856-60) ……イギリスがフランスと結び清を攻撃

1858 天津条約 ……いったん講和するも清朝がこれを批准せず、戦争継続

1860 北京条約 ……清は11港開港、イギリスに九龍半島市街地割譲
外国公使の北京駐在 → 近代的外交

1864 太平天国鎮圧

・漢人官僚 李鴻章らが組織した義勇軍 (郷勇)

→ 彼らによる近代化政策

・アロー戦争後は欧米列強も鎮圧に協力

(洋務運動)

④ 黒船の来航と日本の対応

<海外情報への対応>

- ▶ アヘン戦争の情報が日本へ
オランダ風説書……長崎のオランダ商館長から幕府に提出される海外事情報告書
→ 1842 薪水給与令……方針転換。外国船に薪水・食料を与えて退去させる。
- ▶ 佐賀藩、薩摩藩など……ヨーロッパの思想・技術を吸収し、その進出に備える
- ▶ 水戸藩……独自の朱子学（水戸学）から、尊皇攘夷思想を説く → 諸藩へも広まる

<日本の開国>

- ▶ アメリカの日本進出……ヨーロッパ諸国の 1848 年以降の混乱、クリミア戦争などの隙を突く
清との貿易の中継地、捕鯨船の補給基地として日本に着目
1853 アメリカの東インド艦隊司令長官 ペリー、浦賀に来航
幕府は、アメリカ大統領の国書を受け取る。
ペリーの翌年再来に備え、諸大名・幕臣に意見を求め、朝廷にも報告
↓
- ▶ 朝廷・諸藩が発言力を強め、身分を超えて国民が高い関心を持つようになる。
→ “黒船”が幕末の動乱の引き金に
- ▶ 開国
1854 日米和親条約……下田・箱館の開港、薪水給与、領事駐在の容認
→ 露・英・蘭とも締結
1858 日米修好通商条約……不平等条約
領事裁判権を認める。関税自主権無し。片務的最恵国待遇。
→ 蘭・露・英・仏とも締結（安政の五カ国条約）

<開国の影響と近代化政策>

- ▶ 日本の世界市場参加
 - ・ 生糸、蚕卵紙の大量輸出 → 国内の絹織物業が原料不足で打撃
 - ・ 海外の綿糸・綿織物輸入 → 国内の綿工業に打撃
 - ・ 連動して生活必需品の物価も高騰
※五品江戸廻送令……雑穀・菜種油・蠟・呉服・生糸
江戸の間屋を通して国内需要を満たしてから輸出することに
 - ・ 金の流出……金銀交換比率が日本と外国とで違っていた
日本では金 1 : 銀 5、外国では金 1 : 銀 15
- ▶ 幕府・諸藩の近代化政策
 - ・ 幕府……蕃書調書（欧米の学問）、海軍伝習所（海軍技術） → 諸藩の家臣も招く
 - ・ 薩摩・長州……海外への留学生派遣
長州（伊藤博文・井上馨）、薩摩（五代友厚・寺島宗則・森有礼）

⑤ 新体制の模索と江戸幕府の滅亡

<混乱する国内情勢>

- ▶ 幕府の開国政策を天皇が許可せず → **尊皇攘夷**思想が広まる
 - ・ 尊皇……天皇を尊重しよう
 - ・ 攘夷……異民族（夷）を撃退しよう（攘）
- 1858-59 **安政の大獄**……大老 井伊直弼、反対派を弾圧
開国問題だけでなく、将軍継嗣問題も絡んでいた
- ⇕
- 1860.3 **桜田門外の変**……井伊直弼、元水戸藩士らに暗殺される
- ▶ **公武合体**運動……幕府は、朝廷との結び付きを強めることで権威回復を図る
- 1860.10 **和宮**（孝明天皇の妹）、14代将軍徳川家茂への降嫁決定（→'61 和宮江戸へ）
- 1861 **文久の改革**……薩摩藩の意見を取り入れる
将軍後見職 一橋慶喜、政事総裁職 松平慶永、京都守護職 松平容保
フランスの支援による陸海軍設立を目指す

<新体制の模索と薩摩藩・長州藩>

- ▶ 薩摩藩
- 1862 **生麦事件**……島津久光一行が江戸からの帰途、イギリス人を殺傷
- 1863.7 **薩英戦争**……イギリス艦隊が鹿児島砲撃
- ▶ 長州藩
- 1863.5 下関海峡にて外国船を砲撃＝攘夷決行
- .8 **八月十八日の政変**……長州藩および攘夷派公卿が京を追放される（←薩摩）
- 1864.7 **禁門の変**……京に攻め上るも、薩摩・会津藩兵に撃退される
- .8 第一次**長州征討**……幕府軍が長州を攻撃
- .8 **四国艦隊下関砲撃事件**（前年の報復を受ける）
- ↓
- 1866.1 **薩長同盟**……両藩とも攘夷不可能を悟り開国・倒幕に転換（←坂本龍馬の仲介）
幕府の第二次長州征討に薩摩藩が協力せず
将軍家茂急死で長州征討中止、年末には孝明天皇も急死

<幕府の滅亡と新政府の誕生>

- 1867.10/14 討幕の密勅
幼少の明治天皇の下、三条実美・岩倉具視らが薩長と結び武力討幕目指す
- 同日 **大政奉還**……15代将軍**徳川慶喜**、討幕派に先手を打って朝廷への政権返上
天皇の下で将軍が主導権を握る大名会議設立を目指す
- ⇕
- .12/9 **王政復古の大号令**……薩長ら倒幕派による朝廷内クーデタ、新政府樹立
慶喜の官位・領地を取り上げることを決定
- ↓
- 1868.1 鳥羽伏見の戦い……旧幕府側が反発、新政府との戦争開始＝**戊辰戦争**（～1869）
イギリスは新政府を、フランスは旧幕府側を支援
- .3 江戸無血開城
- 1869.5 箱館五稜郭の戦い……旧幕府勢力の降伏

※旧幕府方・新政府とも諸外国の直接軍事介入を避けるように心がけていた